

第1回 赤松小三郎研究会のご報告

東京・文京アカデミーで8月20日、第1回研究会を開催しました。今回は初回という事もあり、講演会形式で行いました。当日は平日の夜（19時～21時）にもかかわらず、お蔭様で50名の皆様にお集まりいただき、研究会としましては順調なスタートを切ることができました。

<内容>

1. 主催者挨拶・・・滝澤進氏（関東同窓会会長）
2. 基調講演・・・「赤松小三郎と上田藩」～宮地正人氏 東京大学名誉教授（前
東京大学史料編纂所所長、前国立歴史民俗博物館館長）

(1) まずはこの場をお借りして改めて宮地先生にお礼を申し上げたいと思います。ご専攻が日本近代史とのことですが、赤松小三郎や上田藩については専門外であるにもかかわらず、今回の講演のために短期間で多くの史料・文献に基づいてご準備いただきました。本当にありがとうございました。

(2) 1848年（嘉永元年・赤松18歳）に江戸の内田弥太郎の「マテマテカ塾」に入塾する時から、1867年（慶応3年・赤松37歳）に松平春嶽へ7策の建白書を提出・同年京都で暗殺されるまでを、レジメに沿って一通り解説していただく中、一方で「多くの疑問点や明らかになっていない点⇒今後の研究課題」を提示していただきました。

例1) 1854年（嘉永7年・24歳）赤松はなぜ勝塾に入ったのか？また、上田藩の許可はどのような形で出されたのか？・・・当時の上田藩は国家老の藤井右膳派と江戸家老の岡部九郎兵衛派の対立の結果、岡部派が優位になる中で軍政改革が行き詰まるという状況があったが、そのことと関係があるのか？

例2) 1866年（慶応2年・36歳）2月京都での私塾開塾の経緯についての疑問点・・・第二次長州征伐のために上田藩も動員されていた時期で、上田藩士の身分の赤松が開塾するにあたり、藩の許可はどのように得たのか？また、薩摩藩士が多数入塾しているが、当時の上田藩と薩摩藩の関係はどうであったか？⇒上記他、宮地先生による疑問点の多くは、そもそも専門家による研究がこれからであったり、場合によっては古文書の解読を必要とするもので、当研究会でどこまで解明できるかわかりませんが、まずは研究会発足にあたり皆でこれらの疑問点の共通認識を図り、今後の研究活動に活かし

ていきたいと思ひます。

- (3) 講演の導入部分で宮地先生から「そもそも上田藩の研究は地元がしっかりやるべき」というお言葉がありました。これは、講演後にレジメを読み返してみても、当研究会としては「赤松小三郎を研究する上で、上田藩との関係をしっかり把握する必要がある」と、置き換えるとその意味が良く理解できました。最後に、講演の中で宮地先生が何度も強調されていたフレーズがありましたので、ご紹介します。「この研究会が赤松小三郎を単なる郷土自慢に終わらせることなく、史実に基づく研究活動を期待します」
重く受け止めたいと思ひます。

3. 講演・・・・・・・・・・「山本覚馬が京都をつくった」～丸山瑛一氏（51期）

当研究会顧問

丸山氏の講演は、今回もきっちりポイントを整理されたパワーポイント（35枚）を使用したもので、大変わかりやすく工夫されており、頭が下がります。

別途ご用意いただいた参考資料には、

- 1) 赤松小三郎が松平春嶽にあてた「口上書」
- 2) 坂本龍馬の「船中八策」と「新政府綱領八策」
- 3) 山本覚馬の「書付」
- 4) 山本覚馬の「管見」
- 5) 「管見」の要点

が集録されております。

<要約>

これまで赤松小三郎の二院制議会の提案が坂本龍馬の「船中八策」に先駆けているということだけが強調されてきたきらいがあるが、山本覚馬と赤松小三郎の親交に着目すると、赤松の口上書（7策の建白書）に書かれた提案は山本覚馬の「管見」の下敷きにされて京都府と明治政府によって実行された多くの近代化政策に実際に反映されている。その意味で、赤松小三郎は明治日本の近代化政策のグランドデザインを描いた中心人物と言える。（山本覚馬の「京都府顧問」としての活躍は、ちょうど今のNHK大河ドラマ「八重の桜」で様子が良くわかります）

以上

赤松小三郎研究会事務局 荻原貴（79期）

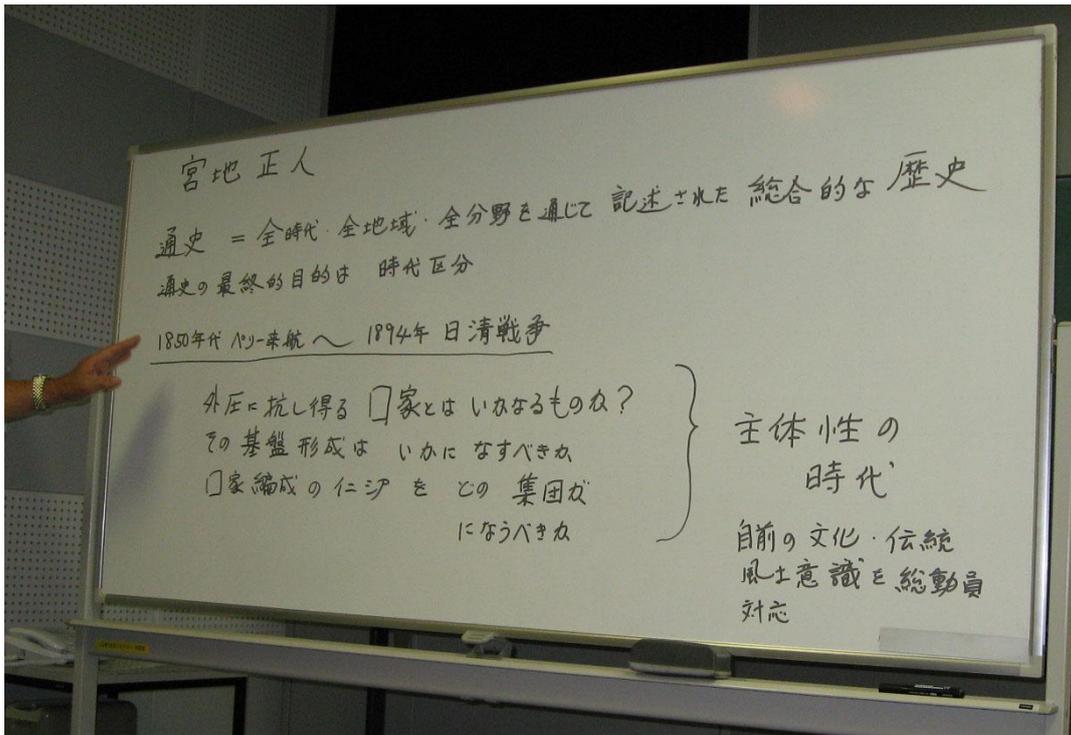
次ページ以降、研究会の写真添付



滝澤関東同窓会長ご挨拶



会場風景



井上剛氏（61期）による宮地先生のご紹介



宮地正人先生のご講演



丸山瑛一顧問（51期）のご講演